

第10期定時株主総会招集ご通知に 際しての書面交付省略事項

- ・ 連結計算書類

連結持分変動計算書

連結注記表

- ・ 計算書類

株主資本等変動計算書

個別注記表

第10期（2022年4月1日から2023年3月31日まで）

PHCホールディングス株式会社

上記の事項につきましては、法令及び当社定款第17条の規定に基づき、書面交付請求をいただいた株主様に対して交付する書面（電子提供措置事項記載書面）への記載を省略しております。

④ 【連結持分変動計算書】

(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	親会社の所有者に帰属する持分						
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	その他の資本の構成要素		
					確定給付制度の再測定	その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産の変動	キャッシュ・フロー・ヘッジ
2022年4月1日時点の残高	47,065	44,118	28,353	△568	—	412	△92
当期包括利益							
当期損失	—	—	△3,222	—	—	—	—
その他の包括利益	—	—	—	—	614	179	39
当期包括利益合計	—	—	△3,222	—	614	179	39
新株の発行	881	△431	—	—	—	—	—
親会社の所有者に対する配当金	—	—	△9,201	—	—	—	—
非支配持分に対する配当金	—	—	—	—	—	—	—
新株予約権及びリストラクテッド・ストック・ユニットの失効	—	△500	496	—	—	—	—
株式報酬取引	—	455	—	—	—	—	—
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替	—	—	655	—	△614	△41	—
所有者との取引額合計	881	△476	△8,049	—	△614	△41	—
2023年3月31日時点の残高	47,946	43,641	17,081	△568	—	550	△52

(単位：百万円)

	親会社の所有者に帰属する持分					
	その他の資本の構成要素			合計	非支配持分	合計
	在外営業活動体の換算差額	持分法適用会社におけるその他の包括利益に対する持分	合計			
2022年4月1日時点の残高	15,753	333	16,406	135,374	690	136,065
当期包括利益						
当期損失	—	—	—	△3,222	173	△3,048
その他の包括利益	12,989	333	14,156	14,156	67	14,223
当期包括利益合計	12,989	333	14,156	10,933	241	11,174
新株の発行	—	—	—	450	—	450
親会社の所有者に対する配当金	—	—	—	△9,201	—	△9,201
非支配持分に対する配当金	—	—	—	—	△112	△112
新株予約権及びリストラクテッド・ストック・ユニットの失効	—	—	—	△4	—	△4
株式報酬取引	—	—	—	455	—	455
その他の資本の構成要素から利益剰余金への振替	—	—	△655	—	—	—
所有者との取引額合計	—	—	△655	△8,300	△112	△8,412
2023年3月31日時点の残高	28,742	666	29,906	138,008	819	138,827

連結注記表

連結計算書類作成のための基本となる重要な事項に関する注記

1. 連結計算書類の作成基準

当社及びその子会社（以下「当社グループ」という。）の連結計算書類は、会社計算規則第120条第1項の規定により、国際会計基準（以下「IFRS」という。）に準拠して作成しています。なお、同項後段の規定により、IFRSにより要請される記載及び注記の一部を省略しています。

2. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 81社

主要な連結子会社の名称 PHC株式会社
Ascensia Diabetes Care Holdings AG
Epredia Holdings Ltd.
株式会社LSIメディエンス

当連結会計年度における連結の範囲の変更

子会社の取得による増加 2社
子会社の新設による増加 2社
子会社の清算による減少 2社

連結子会社の事業年度等に関する事項

決算日が異なる子会社の計算書類は、連結決算日現在で実施した仮決算に基づく計算書類を使用しております。

3. 持分法の適用に関する事項

持分法を適用した関連会社等の数 7社

主要な関連会社等の名称 Lunaphore Technologies SA
Senseonics Holdings, Inc.

当連結会計年度における持分法適用の範囲の変更

当連結会計年度における変更はありません。

持分法適用関連会社等の事業年度等に関する事項

連結計算書類には、他の株主との関係等により、決算日を統一することが実務上不可能であるため、決算日の異なる関連会社への投資が含まれております。当該関連会社の決算日は主に12月31日であり、決算日の差異により生じる期間の重要な取引又は事象の影響については調整を行っております。

4. 重要な会計方針

(1) 金融商品

① 金融資産

(i) 当初認識及び測定

当社グループは、金融資産のうち、営業債権については、これらの発生日に当初認識しております。その他の全ての金融資産は、当該金融商品の契約当事者となった取引日に当初認識されております。純損益を通じて公正価値で測定する区分に分類される場合を除く全ての金融資産を、当初認識時に公正価値に当該金融資産に直接帰属する取引費用を加算した金額で測定しております。純損益を通じて公正価値で測定する金融資産の取引費用は、純損益に認識されております。ただし、重要な金融要素を含まない営業債権は取引価格で当初測定されております。

当社グループは、金融資産を、当初認識時に、(a)償却原価で測定する金融資産、(b)その他の包括利益を通じて公正価値で測定する負債性金融商品、(c)その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品、(d)純損益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類しております。

(a) 償却原価で測定する金融資産

以下の条件がともに満たされる場合には、償却原価で測定する金融資産に分類しております。

・当該金融資産が、契約上のキャッシュ・フローを回収するために金融資産を保有することを目的とする事業モデルの中で保有されている。

・金融資産の契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払のみであるキャッシュ・フローが特定の日に生じる。

(b) その他の包括利益を通じて公正価値で測定する負債性金融商品

以下の条件がともに満たされる場合には、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する負債性金融商品に分類しております。

・当該金融資産が、契約上のキャッシュ・フローの回収と売却の両方によって目的が達成される事業モデルの中で保有されている。

・金融資産の契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払のみであるキャッシュ・フローが特定の日に生じる。

(c) その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品

特定の資本性金融商品について、当初認識時に公正価値の事後の変動をその他の包括利益に表示するという取消不能な選択を行っており、その他の包括利益を通じて公正価値で測定される資本性金融商品に分類しております。

(d) 純損益を通じて公正価値で測定する金融資産

上記以外の金融資産については、純損益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類しております。

(ii) 事後測定

当社グループは、当初認識後の金融資産を、以下のとおりに測定しております。

(a) 償却原価で測定する金融資産

実効金利法による償却原価で測定しております。実効金利法によって計算された金利収益及び認識を中止した場合の利得又は損失は、純損益に認識されております。

(b) その他の包括利益を通じて公正価値で測定する負債性金融商品

公正価値で測定しております。公正価値の変動額は、減損利得又は減損損失及び為替差損益を除き、当該金融資産の認識の中止が行われるまで、その他の包括利益として認識されております。認識を中止した場合には、過去に認識したその他の包括利益を純損益に振り替えております。

(c) その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品

公正価値で測定しております。公正価値の変動額は、その他の包括利益に認識されております。認識を中止した場合には、その他の包括利益の累計額を利益剰余金に振り替えております。なお、当該金融資産からの配当金については、純損益に認識しております。

(d) 純損益を通じて公正価値で測定する金融資産

公正価値で測定し、公正価値の変動額を純損益に認識しております。

(iii) 認識の中止

当社グループは、金融資産からのキャッシュ・フローに対する契約上の権利が消滅した場合、又は金融資産を譲渡し、当該金融資産の所有に係るリスクと経済価値のほとんど全てが移転する場合にのみ、金融資産の認識を中止しております。

(iv) 減損

当社グループは、償却原価で測定される金融資産等について、当該金融資産に係る予想信用損失に対して貸倒引当金を認識しております。

当社グループは、各報告日において、金融商品に係る信用リスクが当初認識以降に著しく増大したかどうかを評価しております。金融商品に係る信用リスクが当初認識以降に著しく増大していない場合には、当該金融商品に係る貸倒引当金を12ヶ月の予想信用損失と同額で測定しております。一方で、金融商品に係る信用リスクが当初認識以降に著しく増大している場合には、当該金融商品に係る貸倒引当金を全期間の予想信用損失と同額で測定しております。ただし、営業債権等については常に貸倒引当金を全期間の予想信用損失と同額で測定しております。

金融商品の予想信用損失は、以下のものを反映する方法で見積っております。

- ・一定範囲の生じ得る結果を評価することにより算定される、偏りのない確率加重金額
- ・貨幣の時間価値
- ・報告日時点で過大なコスト又は労力なしに利用可能である、過去の事象、現在の状況、並びに将来の経済状況の予測についての合理的で裏付け可能な情報

なお、当社グループは、営業債権、契約資産及びリース債権の予想信用損失を見積もる際に、引当マトリクスを用いた実務上の簡便法を採用しております。

当社グループは、金融資産について契約上のキャッシュ・フローの全体又は一部分を回収する合理的な見込みがない場合には、金融資産の総額での帳簿価額を直接減額しております。

② 金融負債

(i) 当初認識及び測定

当社グループは、当該金融商品の契約当事者となった取引日に金融負債を当初認識しております。

当社グループは、金融負債を、当初認識時に、(a)償却原価で測定する金融負債、(b)純損益を通じて公正価値で測定する金融負債に分類しております。

当初認識時に、償却原価で測定する金融負債は、公正価値に当該金融負債に直接帰属する取引費用を控除した金額で測定しております。純損益を通じて公正価値で測定する金融負債の取引費用は、純損益に認識しております。

(ii) 事後測定

当社グループは、当初認識後の金融負債を、その分類に応じて以下のとおりに測定しております。

(a) 償却原価で測定する金融負債

実効金利法による償却原価で測定しております。実効金利法によって計算された金利費用及び認識を中止した場合の利得又は損失は、純損益に認識しております。

(b) 純損益を通じて公正価値で測定する金融負債

公正価値で測定し、公正価値の変動額を純損益に認識しております。

(iii) 認識の中止

当社グループは、金融負債が消滅したとき、すなわち、契約中に特定された債務が免責、取消し、又は失効となった時に、金融負債の認識を中止しております。

③ ヘッジ会計を含むデリバティブ金融商品

当社グループは、外貨エクスポージャーをヘッジするためにデリバティブ金融商品を保有しております。デリバティブは公正価値で当初測定されます。また、当初認識後は、デリバティブは公正価値で測定され、その変動は、キャッシュ・フロー・ヘッジのヘッジ手段として指定される場合を除いて、純損益として認識されます。

当社グループは、取引開始時に、ヘッジ手段とヘッジ対象との関係、並びに種々のヘッジ取引の実施についてのリスク管理目的及び戦略について文書化を行っております。当社グループはまた、ヘッジ取引に利用したデリバティブがヘッジ対象の公正価値又はキャッシュ・フローの変動を相殺するに際し極めて有効であるかどうかについても、ヘッジ開始時及び継続的に評価し文書化を行っております。

当社グループは、キャッシュ・フロー・ヘッジとして指定され、かつその要件を満たすデリバティブの公正価値の変動のうち、有効部分を連結包括利益計算書においてその他の包括利益として、非有効部分に関する利得又は損失を、純損益で即時認識しております。資本に累積された金額は、ヘッジ対象が純損益に影響を与える期に、純損益に組替えられます。しかしながら、ヘッジ対象である予定取引が非金融資産若しくは負債の認識を生じさせるものである場合には、それまで資本に繰り延べていた利得又は損失を振替え、当該資産若しくは負債の測定額に含めております。また、ヘッジ対象である予定取引の発生の可能性がなくなった時点で、資本に計上されている利得又は損失の累計額を純損益に振替えております。

なお、当社グループは、デリバティブではない金融負債を在外営業活動体への純投資に係る外国為替リスクをヘッジするためのヘッジ手段として指定しております。ヘッジ手段として指定された金融負債の為替差損益のうち有効部分は、その他の包括利益に認識され、資本において為替換算調整勘定として表示されます。また、非有効部分は、即時に純損益として表示されます。その他の包括利益に認識された金額は、当該在外営業活動体の処分又は部分的な処分を行った際に全額又は部分的に組替調整額としてそれぞれ純損益に振り替えられます。

④ 金融資産と金融負債の相殺

当社グループは、金融資産と金融負債を相殺する法的に強制力のある権利を有しており、かつ、純額で決済する、又は資産の実現と負債の決済を同時に実行する意図を有している場合のみ、金融資産と金融負債を相殺して純額で表示しております。

(2) 棚卸資産

棚卸資産は主として、商品及び製品、仕掛品、原材料及び貯蔵品から構成されております。

棚卸資産は、取得原価と正味実現可能価額のうちのいずれか低い金額で測定しております。取得原価は主として総

平均法に基づいて算定しており、購入原価、加工費、及び棚卸資産を現在の場所及び状態にするまでに要したその他の費用が含まれております。製品及び仕掛品については、正常生産能力に基づく製造間接費の適切な配賦額を含めております。正味実現可能価額は、通常の事業の過程における見積売価から、完成までに要する見積原価及び販売に要する見積費用を控除した額であります。

(3) 有形固定資産

当社グループは、有形固定資産の認識後の測定方法として、原価モデルを採用しております。有形固定資産は取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額で表示されております。

取得原価には、購入価格、資産の取得に直接関連する費用、解体、除去及び原状回復費用、並びに資産計上の要件を満たす借入費用が含まれております。

当社グループは、土地及び建設仮勘定以外の有形固定資産を、各資産の見積耐用年数にわたり、定額法に基づいて減価償却しております。これらの資産の減価償却は、使用可能となった時点から開始しております。

主な資産の種類別の耐用年数は以下のとおりであります。

- ・建物及び構築物 2～50年
- ・機械装置及び運搬具 2～15年

なお、減価償却方法、残存価額及び残余耐用年数は、期末日毎に見直しを行い、必要に応じて改定しております。

(4) のれん

当初認識時におけるのれんは、企業結合で移転された対価、被取得企業の非支配持分の金額、及び取得企業が以前に保有していた被取得企業の資本持分の公正価値の合計が、取得時における識別可能な資産及び負債の正味価額を上回った場合にその超過額として測定しております。

のれんは、取得価額から減損損失累計額を控除した価額で表示しております。

持分法適用会社については、のれんの帳簿価額を投資の帳簿価額に含めております。また、当該投資に係る減損損失は、持分法適用会社の帳簿価額の一部を構成する、のれんを含むいかなる資産にも配分しておりません。

(5) 無形資産

当社グループは、当初認識時において、個別に取得した無形資産を取得原価で測定し、企業結合において取得した無形資産を、取得日現在における公正価値で測定しております。

自己創設無形資産については、資産認識の要件を満たすものを除き、関連する支出は発生時に費用処理しております。資産の認識基準を満たす場合は、認識基準を最初に満たした日以降に発生する支出の合計額を取得原価としております。

無形資産の事後測定においては、原価モデルを採用し、取得原価から償却累計額及び減損損失累計額を控除した価額で表示しております。

内部発生の研究費用は発生時に費用として認識されております。

当社グループは、耐用年数を確定できる無形資産を、各資産の見積耐用年数にわたり、定額法で償却しております。これらの無形資産の減価償却は、使用可能となった時点から開始しております。

主な無形資産の種類別の耐用年数は、以下のとおりであります。

- ・特許権 5～8年
- ・顧客関連資産 7～20年
- ・商標権 10～16年
- ・技術資産 9～12年

なお、償却方法、残存価額及び残余耐用年数は、期末日毎に見直しを行い、必要に応じて改定しております。

(6) リース

① 借手

当社グループは、リース開始日時点において、使用权資産及びリース負債を認識しております。

リース負債は、リース開始日におけるリース料総額の未決済分を借手の追加借入利率で割り引いた現在価値として測定し、使用权資産は、リース負債の当初測定額に、リース開始日以前に支払われた前払リース料を加算し、当初直接コストやリース契約に基づき要求される原状回復義務等のコストを加えた額で測定しております。当初認識後は、リース期間の終了時までに原資産の所有権が当社グループに移転するか、又は使用权資産の取得原価に購入オプションを行使する見込みが反映されている場合は、使用权資産は原資産の耐用年数にわたって、

それ以外の場合には、使用权資産の耐用年数又はリース期間のいずれか短い期間にわたって定額法で減価償却しております。リース料は、利息法に基づき金融費用とリース負債の返済額に配分し、金融費用は連結損益計算書において認識しております。

ただし、リース期間が12ヶ月以内の短期リース及び原資産が少額のリースについては、使用权資産及びリース負債を認識せず、リース料総額をリース期間にわたって定額法又は他の規則的な方法により費用として認識しております。

契約がリース又はリースを含んだものであるのかどうかを判断し、リース期間を決定します。契約がリース又はリースを含んだものであるのかどうかの判断は、対象資産が特定され、かつ、特定された資産の使用を借手が支配しているかどうかで行います。支配とは、借手が資産を使用する期間にわたって、借手が特定された資産の使用からの経済的便益のほとんど全てを得る権利を有しており、かつ、借手が特定された資産の使用を指図する権利を有している場合を言います。リース期間を決定するためには、借手がリースを延長するオプションを行使すること又はリースを解約するオプションを行使しないことへの経済的インセンティブを生じさせる全ての関連性のある事実及び状況を考慮した上で、延長オプション又は解約オプションを行使するか否かを判断する必要があります。見積りには追加借入利率に基づく割引率の計算を含みます。

② 貸手

リースはオペレーティング・リース又はファイナンス・リースのいずれかに分類しております。原資産の所有に伴うリスクと経済価値のほとんど全てを移転する場合にはファイナンス・リースに分類し、移転しない場合にはオペレーティング・リースに分類しております。リースがファイナンス・リースかオペレーティング・リースかは、契約の形式ではなく取引の実質に応じて判断しております。

なお、当社グループが中間の貸手である場合、サブリースの分類は、ヘッドリースから生じる使用权資産を参照して分類しております。

(7) 非金融資産の減損

当社グループは、棚卸資産、退職給付に係る資産及び繰延税金資産を除く、非金融資産の減損の兆候の有無を評価しております。

減損の兆候が存在する場合又は年次で減損テストが要求されている場合は、各資産の回収可能価額の算定を行っております。のれん及び耐用年数を確定できない、又は未だ使用可能ではない無形資産については、毎年又は減損の兆候が存在する場合、減損テストを実施しております。

資産又は資金生成単位の回収可能価額は、売却費用控除後の公正価値と使用価値とのうちいずれか高い方の金額で測定しております。使用価値は、貨幣の時間的価値及び当該資産に固有のリスクを反映した税引前の割引率を用いて現在価値に割り引いたキャッシュ・フロー予測に基づいております。資産又は資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額より低い場合にのみ、当該資産の帳簿価額をその回収可能価額まで減額し、純損益として認識しております。

資金生成単位については、他の資産又は資産グループからのキャッシュ・インフローから概ね独立したキャッシュ・インフローを生成するものとして識別する資産グループの最小単位としております。

資金生成単位に関連して認識した減損損失は、まずその単位に配分されたのれんの帳簿価額を減額するように配分し、次に資金生成単位内のその他の資産の帳簿価額を比例的に減額します。

のれんに関連する減損損失は戻入れておりません。

のれん以外の資産については、過去に認識した減損損失は、期末日ごとに、過年度に計上した減損損失の戻入りの兆候の有無を評価しております。回収可能価額の決定に使用した見積りが変化した場合は、減損損失を戻入れております。

減損損失は、減損損失を認識しなかった場合の帳簿価額から必要な減価償却費及び償却額を控除した後の帳簿価額を超えない金額を上限として戻し入れております。

関連会社への投資の帳簿価額の一部に含まれる関連会社の取得に係るのれんについては、他の部分と区分せず、関連会社に対する投資を一体の資産として、減損の対象としております。

(8) 従業員給付

① 短期従業員給付

当社グループは、割引計算は行わず、関連するサービスが提供された時点で割引計算を行わない金額を費用として、その未払額を負債として認識しております。

賞与については、当社グループが、従業員から過去に提供された労働の結果として支払うべき現在の法的又は推定的債務を負っており、かつその金額を信頼性をもって見積ることができる場合にそれらの制度に基づいて支払われる見積額を負債として認識しております。

② 長期従業員給付

(i) 退職後給付

一部の連結子会社は、確定給付型の制度として、退職一時金制度及び確定給付企業年金制度を採用しており、また、確定拠出型の制度として、確定拠出年金制度を採用しております。

(a) 確定給付制度

当社グループは、確定給付制度債務の現在価値及び関連する退職給付費用を、予測単位積増方式を用いて制度ごとに個別に算定しております。割引率については、将来の毎年度の給付支払見込日までの期間を基に割引期間を設定し、割引期間に対応した期末日の優良社債の市場利回りに基づき算定しております。

確定給付制度に係る負債又は資産は、確定給付制度債務の現在価値から、制度資産の公正価値を控除して算定されております。

確定給付制度に係る負債又は資産の再測定額は、発生した期間にその他の包括利益として認識され、その後純損益には振り替えられません。また、過去勤務費用は発生した期間に純損益として認識されております。

(b) 確定拠出制度

当社グループは、確定拠出型の退職後給付に係る費用を、従業員が役務を提供した期に費用として認識しております。

(c) 複数事業主制度

一部の子会社では確定給付制度に分類される複数事業主による年金制度に加入しております。これらについては、確定給付の会計処理を行うための十分な情報を入手できない場合は、確定拠出制度と同様の処理を行っております。

(ii) その他の長期従業員給付

従業員が過年度及び当年度において提供したサービスの対価として獲得した将来給付額を現在価値に割引くことによって長期従業員給付に対する純債務を算定しております。再測定による差異は発生した期間に純損益で認識しております。

(9) 株式に基づく報酬

当社グループは、役員及び従業員に対するインセンティブ制度として、持分決済型のストック・オプション制度を採用しております。ストック・オプションは、付与日における公正価値によって見積り、最終的に権利確定すると予想されるストック・オプションの数を考慮した上で、権利確定期間にわたって費用として認識し、同額を資本剰余金の増加として認識しております。付与されたストック・オプションの公正価値は、オプションの諸条件を考慮し、ブラック・ショールズ・モデル等を用いて算定しております。また、その後の情報により確定すると見込まれるストック・オプションの数が従前の見積りと異なることが示された場合には、必要に応じて権利確定の見積りを修正しております。

(10) 引当金

当社グループは、過去の事象の結果として、当社グループが法的又は推定的債務を負っており、当該債務を決済するために経済的資源の流出が生じる可能性が高く、債務の金額について信頼性のある見積りができる場合に引当金を認識しております。

引当金の貨幣の時間的価値が重要な場合には、見積将来キャッシュ・フローを貨幣の時間的価値及び当該負債に特有のリスクを反映した税引前割引率を用いて現在価値に割引いております。時の経過に伴う割引額の振り戻しは金融費用として認識しております。

(11) 顧客との契約から生じる収益

当社グループは、下記の5ステップアプローチに基づき、顧客との契約から生じる収益を認識しております。

- ステップ1：顧客との契約を識別する
 - ステップ2：契約における履行義務を識別する
 - ステップ3：取引価格を算定する
 - ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する
 - ステップ5：企業が履行義務の充足時に収益を認識する
- 会計方針の詳細は、収益認識に関する注記に記載しております。

(12) 外貨換算

① 外貨建取引

当社グループは、外貨建取引を、取引日の為替レート又はそれに近似するレートで機能通貨に換算しております。

決算日における外貨建貨幣性項目は、決算日の為替レートで、公正価値で測定される外貨建非貨幣性項目は、当該公正価値の算定日の為替レートで、それぞれ機能通貨に再換算されております。

当該換算及び決済により生じる換算差額は原則として純損益に認識されております。

② 在外営業活動体の財務諸表

当社グループは、在外営業活動体の資産・負債（取得により発生したのれん及び公正価値の調整を含む）は期末日の為替レート、収益及び費用は取引日の為替レート又はそれに近似するレートで円に換算しております。

在外営業活動体の財務諸表の換算から生じる為替換算差額は、その他の包括利益として認識し、その累積額は、連結財政状態計算書上、「その他の資本の構成要素」に計上しております。

在外営業活動体が処分された場合には、在外営業活動体の累積換算差額を処分した期の純損益として認識しております。

(13) その他

当社及び一部の国内子会社は、グループ通算制度を適用しております。

5. 会計上の見積り

当社グループは、連結計算書類の作成において、会計方針の適用並びに資産、負債、収益及び費用の金額に影響を及ぼす判断及び見積りを行っております。実際の業績は、これらの見積りとは異なる場合があります。

会計上の見積り及びその基礎となる仮定は継続して見直されます。会計上の見積りの見直しによる影響は、その見積りを見直した会計期間及び将来の会計期間において認識されます。

将来に関して行う仮定及び見積りの不確実性の他の主要な発生要因のうち、翌連結会計年度中に資産及び負債の帳簿価額に重要性のある修正を生じる重要なリスクがあるものは以下のとおりであります。

(1) 非金融資産の減損（のれん 199,707百万円、無形資産 91,123百万円、有形固定資産 47,593百万円）

当社グループは、非金融資産が減損している可能性を示す兆候がある場合、当該資産の回収可能価額を見積もっております。また、企業結合で取得したのれんについては、減損の兆候の有無に関わらず、年に1度減損テストを実施しており、のれんを配分した資金生成単位又は資金生成単位グループの回収可能価額を算定しております。これらの回収可能価額の算定に当たって将来キャッシュ・フローを用いる場合、当該キャッシュ・フロー予測は、経営者が作成した各事業の中期経営計画及び中期経営計画期間経過後の成長率を基礎としております。また、割引率は、貨幣の時間価値及び関連する資産に固有のリスクのうち、それについて将来キャッシュ・フローの見積りを調整していないものに関する市場評価を反映することによって決定しております。

これらの判定については、経営者の最善の見積りと判断により決定していますが、将来の不確実な経済条件の変動結果によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、翌連結会計年度の連結計算書類に重要な影響を与える可能性があります。

(2) 収益認識に当たって予想される返金の見積り（返金負債 11,794百万円）

当社グループは、顧客から受け取った対価のうち、リベートの支払い、返品等によって顧客に返金すると見込まれる金額を、返金負債として認識しております。また、当社グループは、契約において顧客と約束した対価から返金負債を控除した金額を取引価格とし、関連する履行義務を充足した際に、当該取引価格を収益として認識しております。返金負債の見積りに係る不確実性がその後解消される際に、認識した収益の累計額に重大な戻入れが生じない可能性が非常に高い範囲でのみ収益は認識されておりますが、予想しえない事象の発生や状況の変化によって影響を受

ける可能性があり、実際の支払額が返金負債の見積りと異なった場合、翌連結会計年度の連結計算書類において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。

(3) 棚卸資産の測定 (棚卸資産 51,732百万円)

当社グループは、棚卸資産について、正味実現可能価額の算定において完成までに要する原価及び販売費用について仮定を設定しています。これらの仮定については、経営者の最善の見積りと判断により決定していますが、将来の不確実な経済条件の変動結果によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、翌連結会計年度の連結計算書類に重要な影響を与える可能性があります。

(4) 引当金の測定 (引当金 7,896百万円)

当社グループは、リストラクチャリング引当金や製品保証引当金等、種々の引当金を計上しております。これらの引当金は、決算日における債務に関するリスク及び不確実性を考慮に入れた、債務の決済に要する支出の最善の見積りに基づいて計上されております。

債務の決済に要する支出額は、将来の起こりうる結果を総合的に勘案して算定しておりますが、予想しえない事象の発生や状況の変化によって影響を受ける可能性があり、実際の支払額が見積りと異なった場合、翌連結会計年度の連結計算書類において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。

(5) 従業員給付の測定 (退職給付に係る負債 7,875百万円)

当社グループは、確定給付型を含む様々な退職給付制度を有しています。これらの各制度に係る確定給付制度債務の現在価値及び関連する勤務費用等は、割引率、昇給率、退職率、死亡率等の数理計算上の仮定に基づいて算定されています。数理計算上の仮定は、経営者の最善の見積りと判断により決定していますが、将来の不確実な経済条件の変動の結果によって影響を受ける可能性があり、見直しが必要となった場合、翌連結会計年度の連結計算書類に重要な影響を与える可能性があります。

(6) 繰延税金資産の回収可能性 (繰延税金資産 4,425百万円)

繰延税金資産は、将来減算一時差異を利用できる課税所得が生じる可能性が高い範囲内で認識しております。

繰延税金資産の認識に際しては、課税所得が生じる可能性の判断において、事業計画に基づいて将来獲得しうる課税所得の時期及びその金額を合理的に見積り、金額を算定しております。課税所得が生じる時期及び金額は、将来の不確実な経済条件の変動によって影響を受ける可能性があり、実際に生じた時期及び金額が見積りと異なった場合、翌連結会計年度の連結計算書類において認識する金額に重要な影響を与える可能性があります。

連結財政状態計算書に関する注記

1. 資産から直接控除した貸倒引当金

営業債権及びその他の金融資産 (流動)	2,135百万円
その他の金融資産 (非流動)	5百万円

2. 有形固定資産の減価償却累計額及び減損損失累計額 82,560百万円

連結損益計算書に関する注記

1. のれんの減損損失

診断・ライフサイエンスセグメントの病理事業において、主に加重平均資本コストを算出する際の金利 (リスクフリーレート) 等の上昇を受けて将来キャッシュ・フローの現在価値が減少し、当該資金生成単位の回収可能価額が帳簿価額を下回ったことにより、8,717百万円の減損損失が「その他の費用」に認識されております。

連結持分変動計算書に関する注記

1. 当連結会計年度末における発行済株式の種類及び総数
普通株式 125,522,074株
2. 当連結会計年度末における自己株式の種類及び総数
普通株式 211,941株
3. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
普通株式	4,709	利益剰余金	38	2022年3月31日	2022年6月30日
普通株式	4,491	利益剰余金	36	2022年9月30日	2022年12月5日

- (2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの
2023年6月23日開催の第10期定時株主総会において、配当に関する事項を次のとおり付議しております。

株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
普通株式	4,511	利益剰余金	36	2023年3月31日	2023年6月26日

4. 当連結会計年度の末日における新株予約権（権利行使期間の初日が到来していないものを除く。）の目的となる株式の種類及び数
普通株式 2,793,187株

金融商品に関する注記

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 資本管理

当社グループは、事業の競争力を高めて継続的な成長を図り、企業価値を最大化することを資本管理の基本としております。そのための事業の投資等に対する資金は借入金等の手段を総合的に勘案して調達を実施しております。当社グループは、リスクに見合った十分な自己資本を確保し、自己資本の充実と有効活用に努め、財務の健全性と資本コストのバランスを考慮し、適切な資本構成の維持をしております。

(2) 財務上のリスク管理

当社グループは、事業環境・金融市場環境による影響を受けております。事業活動の過程で保有する又は引き受ける金融商品は固有のリスクにさらされております。リスクには、①信用リスク、②流動性リスク及び③市場リスクが含まれております。当社グループは、社内での管理体制の構築や金融商品を用いてグループの財政状態及び業績に与える影響を最小限にする危機管理を実行しております。

2. 金融商品の公正価値等に関する事項

(1) 公正価値で測定されない金融資産及び金融負債

当社グループは、現金及び現金同等物、営業債権、その他の金融資産、営業債務及びその他の債務、借入金、その他の金融負債の金融商品を保有しております。これらの帳簿価額は公正価値と一致又は近似していることから、公正価値の開示を省略しております。

(2) 公正価値で測定される金融資産及び金融負債

公正価値で計上される金融商品を評価方法ごとに分析した表は、以下のとおりであります。

それぞれのレベルは、以下のように定義付けられております。

レベル1：活発な市場における同一資産・負債の市場価格（調整前の価格）

レベル2：レベル1に含まれる市場価格以外の、資産・負債について直接的（すなわち価格として）又は間接的（すなわち価格に起因して）に観察可能なインプット

レベル3：観察可能な市場データに基づかない資産・負債についてのインプット（観察不能なインプット）

3. 金融商品の時価の適切な区分ごとの内訳等に関する事項
当連結会計年度（2023年3月31日）

（単位：百万円）

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
金融資産				
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産				
貸付金	－	6,451	726	7,177
デリバティブ	－	205	－	205
その他	－	－	265	265
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産				
株式	1,360	352	1,946	3,658
新株予約権	－	1,452	－	1,452
金融負債				
純損益を通じて公正価値で測定する金融負債				
デリバティブ	－	108	－	108
条件付対価	－	－	43	43

レベル間の重要な振替が行われた金融商品の有無は毎期末日に判断しております。当連結会計年度において、保有銘柄の上場によりレベル3からレベル1への振替が行われております。「公正価値ヒエラルキーのレベル3に分類される公正価値測定金融資産に関する期首残高と期末残高の調整表」をご参照ください。

貸付金（株式転換権付）及び新株予約権については、二項モデル等の金融業界において広く受け入れられている評価モデルを適用しております。評価モデルで使用している株価及び金利等の基礎データは市場で容易に観察可能なものであるため、主観性が高いものではありません。

公正価値ヒエラルキーのレベル3に分類される公正価値測定の金融資産に関する期首残高と期末残高の調整表は、以下のとおりであります。

当連結会計年度（自 2022年4月1日 至 2023年3月31日）

(単位：百万円)

	純損益を通じて公正価値で測定する金融資産	その他の包括利益を通じて公正価値で測定する金融資産	純損益を通じて公正価値で測定する金融負債
期首残高	661	1,676	341
取得	294	453	85
利得及び損失			
純損益（注）	35	-	10
その他の包括利益	-	790	-
売却・決済	-	-	△394
レベル1への振替	-	△607	-
その他	-	△365	-
期末残高	992	1,946	43

(注) . 純損益を通じて公正価値で測定する金融資産に関するものは、連結損益計算書上、「金融収益」又は「金融費用」に含まれております。

当社グループは、非上場株式の公正価値の測定にあたり、割引キャッシュ・フロー若しくは類似会社比較法を用いて計算しております。類似会社比較法による計算に当たっては、投資先と比較可能な企業の相場価格から算出した市場倍率を使用しております。

条件付対価の公正価値は割引キャッシュ・フローに基づいて測定しております。条件付対価の公正価値の事後測定により発生した変動額は、純損益で認識しております。

収益認識に関する注記

1. 収益の分解

事業セグメントと主たる地域による収益分解は以下のとおりであります。

当連結会計年度（自 2022年4月1日 至 2023年3月31日）

(単位：百万円)

	糖 尿 病 マネジメント	ヘルスケア ソリューション	診断・ライフ サイエンス	そ の 他	合 計
地域別					
日本	8,136	127,126	15,254	270	150,787
欧州	59,802	3,519	27,517	－	90,840
北米	25,047	257	49,536	－	74,841
その他	18,839	2,646	16,466	2,012	39,966
合計	111,826	133,550	108,774	2,283	356,434

なお、その他の源泉から認識した収益の額に重要性はありません。

2. 契約残高

当社グループの契約残高は、契約負債であり、期首時点の残高は4,671百万円及び当期残高は5,173百万円であります。また、顧客との契約から生じた債権は、営業債権に含まれております。

当連結会計年度に認識した収益のうち、期首時点の契約負債残高に含まれていた金額は、3,102百万円でありませ

ず。
当連結会計年度において、取引価格の変動等により、過年度に充足した履行義務に関して認識した収益はありません。

3. 履行義務

(1) 履行義務を充足する時点

契約上、特段の定めがない限り、原則として、顧客の検収時点で顧客に支配が移転し、履行義務が充足されるため、それらについては顧客による検収が行われた時点で収益を認識しております。また、契約上、リスク負担の移転時期について定めがある場合は、物品の引渡し時等、当該契約に定めるリスク負担の移転の時点で履行義務が充足されます。

(2) 対価の支払条件

履行義務を充足した後、概ね3ヶ月以内に支払を受けております。

(3) 顧客に移転する物品又はサービスの内容

顧客に移転する物品又はサービスは、主として血糖自己測定システム、POCT製品、電気式医薬品注入器、研究・医療支援機器、病理診断機器、レセプトコンピュータ・電子カルテ及び臨床検査サービスであります。当社グループでは、重要な代理人としての取引は行っておりません。

(4) 返品、返金等に応じる義務

当社グループでは、一部の地域において返品権又は類似の権利の付された製品の販売を行っております。製品が返品された場合、当社グループは当該商品の対価を返金する義務を有しております。

(5) 製品保証の種類及び関連する義務

当社グループでは、履行義務として取り扱うべき製品保証又は類似の権利の付された製品の販売は行っていません。

なお、製品の販売契約の一部において、引渡し後に生じた製品の欠陥による故障に対して無償で修理又は交換を行う製品保証義務を有しておりますが、当該保証義務は、製品が顧客との契約に定められた仕様に従って意図したとおりに機能するという保証を顧客に提供するものであるため、製品保証引当金として認識しております。

4. 取引価格の算定

契約において約束された対価が変動性のある金額を含んでいるため、取引価格の算定に当たって、当社グループは、約束した財又はサービスの顧客への移転と交換に権利を得ることとなる対価の金額を見積もっております。一部の地域の販売についてリベートを付す場合、当社グループは、契約において顧客と約束した対価から当該リベートの見積額を控除した金額で取引価格を算定しております。また、当社グループは、返品について、発生しうると考えら

れる予想返金額を算定し、当該見積額を控除した金額で取引価格を算定しております。これらの変動対価は、変動対価に関する不確実性がその後解消される際に、認識した収益の累計額に重大な戻入れが生じない可能性が非常に高い範囲でのみ、取引価格に含まれております。

当社グループは、顧客から受け取った対価のうち、リベートの支払い、返品等によって顧客に返金すると見込まれる金額は、返金負債として認識しております。また、関連する履行義務を充足した際に、契約において顧客と約束した対価から返金負債を控除した取引価格を収益として認識しております。

なお、当社グループは、対価の金額に重要な金融要素が含まれる製品の販売又はサービスの提供を行っておりません。

5. 期末に残存する履行義務に配分された取引価格

残存履行義務に配分した取引価格及び収益の認識が見込まれる時期は以下のとおりであります。

(単位：百万円)

	当連結会計年度 (2023年3月31日)
1年以内	2,060
1年超	2,016
合計	4,077

なお、当社グループは実務上の便法を適用しているため、当初の予想期間が1年以内の契約に含まれる履行義務については記載を省略しております。

6. 顧客との契約の獲得又は履行のためのコストから認識した資産

当連結会計年度において、契約コストから認識した資産はありません。

1 株当たり情報に関する注記

- 1株当たり親会社所有者帰属持分 1,101.33円
- 基本的1株当たり当期損失 △25.84円
- 希薄化後1株当たり当期損失 △25.84円

重要な後発事象に関する注記

該当事項はありません。

株主資本等変動計算書

(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本								株主資本 合計
	資本剰余金					利益剰余金		自己株式	
	資本金	新株式 申込 証拠金	資本準備金	その他 資本 剰余金	資本 剰余金 合計	その他 利益 剰余金 繰越利益 剰余金	利益 剰余金 合計		
当期首残高	47,065	31	17,107	20,142	37,250	7,498	7,498	△568	91,276
当期変動額									
新株の発行 (新株予約権の行使)	620	△450	620	—	620	—	—	—	791
新株の発行 (リストリクテッド・ ストック・ユニットに 基づく新株式発行)	260	—	260	—	260	—	—	—	521
新株式申込証拠金の払込	—	454	—	—	—	—	—	—	454
剰余金の配当	—	—	—	—	—	△9,201	△9,201	—	△9,201
当期純利益	—	—	—	—	—	19,321	19,321	—	19,321
株主資本以外の項目の 事業年度中の変動額 (純額)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
当期変動額合計	881	4	881	—	881	10,120	10,120	—	11,888
当期末残高	47,946	35	17,989	20,142	38,132	17,618	17,618	△568	103,164

(単位：百万円)

	評価・換算差額等			新株予約権	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	8,848	△5,435	3,413	2,096	96,785
当期変動額					
新株の発行 (新株予約権の行使)	—	—	—	—	791
新株の発行 (リストリクテッド・ ストック・ユニットに 基づく新株式発行)	—	—	—	—	521
新株式申込証拠金の払込	—	—	—	—	454
剰余金の配当	—	—	—	—	△9,201
当期純利益	—	—	—	—	19,321
株主資本以外の項目の 事業年度中の変動額 (純額)	△7,462	△3,929	△11,392	△587	△11,979
当期変動額合計	△7,462	△3,929	△11,392	△587	△91
当期末残高	1,385	△9,364	△7,978	1,508	96,694

個別注記表

自 2022年4月 1日

至 2023年3月31日

I. 重要な会計方針に係る事項に関する注記

1. 資産の評価基準及び評価方法

有価証券

関係会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法

(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等

移動平均法による原価法

2. 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産 定額法

なお、耐用年数は以下のとおりであります。

建物 5年～10年

工具器具備品 2年～10年

無形固定資産 定額法

なお、耐用年数は以下のとおりであります。

商標権 10年

ソフトウェア 3年

3. 退職給付引当金の計上の方法

執行役員の退職金の支給に備えるため、内規に基づく当事業年度末要支給額を退職給付引当金として計上しております。

4. 役員退職慰労引当金の計上の方法

取締役及び監査役の退職慰労金の支給に備えるため、内規に基づく当事業年度末要支給額を役員退職慰労引当金として計上しております。

5. 賞与引当金の計上の方法

従業員に対して支給する賞与の支出に充てるため、支給見込額を計上しております。

6. 契約損失引当金の計上の方法

将来の契約履行に伴い発生する可能性のある損失に備えるため、損失の見込額を計上しております。

7. 株式給付引当金の計上の方法

株式交付規則に基づく取締役および従業員への当社株式の給付等に備えるため、当事業年度末における株式給付債務の見込額に基づき、計上しております。

8. 収益及び費用の計上基準

当社の収益は、子会社からの経営指導料及び受取配当金等となります。経営指導料においては、子会社への契約内容に応じた受託業務を提供することが履行義務であり、業務が実施された時点で当社の履行義務が充足されることから、当該時点で収益及び費用を認識しております。受取配当金については、配当金の効力発生日をもって認識しております。

9. 重要なヘッジ会計の方法

- ① ヘッジ会計の方法
繰延ヘッジ処理を採用しております。
- ② ヘッジ手段とヘッジ対象
ヘッジ手段
外貨建借入金
ヘッジ対象
在外子会社の持分
- ③ ヘッジ方針
為替変動リスクの低減のため、実需の範囲内でヘッジを行うこととしております。
- ④ ヘッジ有効性評価の方法
ヘッジ手段とヘッジ対象に関する重要な条件が同一であり、ヘッジ開始時及びその後も継続して相場変動又はキャッシュ・フロー変動を相殺するものと想定することができるため、ヘッジの有効性の評価は省略しております。

10. グループ通算制度の適用

当社は当事業年度よりグループ通算制度を適用しております。

また当事業年度の期首から、グループ通算制度を適用する場合における法人税及び地方法人税並びに税効果会計の会計処理及び開示の取扱いを定めた「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」（実務対応報告第42号 2021年8月12日）を適用しております。

11. その他

記載金額は、百万円未満を切り捨てて表示しております。

II. 会計上の見積りに関する注記

会計上の見積りにより当事業年度に係る計算書類にその額を計上した項目であって、翌事業年度に係る計算書類に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次のとおりです。

繰延税金資産 2,255百万円

繰延税金資産の認識は、将来の事業計画に基づく課税所得の発生時期及び金額によって見積っております。当該見積りは、将来の不確実な経済条件の変動などによって影響を受ける可能性があり、実際に発生した課税所得の時期及び金額が見積りと異なった場合、翌事業年度の計算書類において、繰延税金資産の金額に重要な影響を与える可能性があります。

III. 貸借対照表に関する注記

1. 有形固定資産の減価償却累計額		81百万円
2. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務		
短期債権	営業未収入金	2,867百万円
	未収入金	2,746百万円
	短期貸付金	39,026百万円
長期債権	長期貸付金	95,323百万円
	長期未収入金	58百万円
短期債務	短期借入金	61,494百万円
	未払金	1,023百万円
	預り金	2,267百万円

3. 財務制限条項

当社の借入金294,005百万円には、以下の財務制限条項が付されております。

- ① 各事業年度の末日における連結資本の金額は契約に定める一定金額を下回らないこと
- ② 連続する2会計年度において、マイナスの連結営業利益を計上しないこと

③ 長期債務格付を取得した場合、契約に定める一定以上を維持すること

IV. 損益計算書に関する注記

関係会社との取引高	
営業収益	32,683百万円
その他営業取引高	3,971百万円
営業取引以外の取引高	5,737百万円

V. 株主資本等変動計算書に関する注記

当事業年度末日の自己株式数に関する事項	
普通株式	211,941株

VI. 税効果会計に関する注記

繰延税金資産の発生主な原因

繰延税金資産	
税務上の繰越欠損金	1,666百万円
減価償却超過額	26百万円
賞与引当金	71百万円
繰延資産の償却超過額	122百万円
株式報酬費用	107百万円
繰延ヘッジ損益	3,806百万円
その他	744百万円
繰延税金資産 小計	6,546百万円
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	△1,666百万円
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	△1,210百万円
評価性引当額 小計	△2,877百万円
繰延税金資産 合計	3,669百万円
繰延税金負債	
外貨建借入金換算調整	614百万円
その他有価証券評価差額金	799百万円
繰延税金負債 合計	1,413百万円
繰延税金資産の純額	2,255百万円

Ⅶ. 関連当事者との取引に関する注記

子会社等

(単位：百万円)

区分	名称	議決権等の所有	関連当事者との関係		取引の内容	取引金額	科目	期末残高
			役員の兼任等	事業上の関係				
子会社	P H C株式会社	直接100%	役員の兼任1名	経営管理	マネジメントサービスの提供(注1)	4,294	営業未収入金	1,010
					資金の貸付(注2)	8,483	短期貸付金	8,405
					受取利息(注2)	57		
					資金の回収(注3)	5,645	長期貸付金	89,764
	受取利息(注3)	3,885						
	株式会社L S Iメディエンス	直接100%	-	経営管理	資金の貸付(注2)	11,491	短期貸付金	14,727
					受取利息(注2)	65		
					受取利息(注3)	48	長期貸付金	4,833
	Ascensia Diabetes Care Holdings AG	間接100%	-	経営管理	資金の借入(注4)	12,059	短期借入金	61,494
					支払利息(注4)	782		
	Epredia Holdings Ltd. その他子会社3社	直接100%	-	経営管理	人件費等の支払(注5)	2,424	未払金	556
					資金の貸付(注3)	7,807	短期貸付金	14,296
受取利息(注3)					434			

役員及び個人主要株主等

(単位：百万円)

種類	氏名	議決権等の所有	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額	科目	期末残高
役員	宮崎 正次	被所有 直接0.1%	代表取締役社長 (CEO)	ストック・オプションの行使 (注6)	31	-	-
	池内 孝一	被所有 直接0.0%	監査役	ストック・オプションの行使 (注6)	11	-	-
	フレデリック・ライデンバック	-	常務執行役員 (CFO)	リストラクテッド・ストック・ユニットに基づく新株式発行 (注7)	117	-	-
	山口 快樹	被所有 直接0.0%	常務執行役員 (CSO)	ストック・オプションの行使 (注8)	63	-	-

取引条件及び取引条件の決定方針等

(注1) P H C株式会社へのマネジメントサービスの提供については、市場価格を勘案の上、決定しております。

(注2) P H C株式会社及び株式会社L S Iメディエンスへの短期貸付金の貸付については、短期間での反復取引のため取引金額は、当事業年度における純増減額を記載しております。なお、利息の受取については、市場金利を勘案して利率を合理的に決定しております。

(注3) P H C株式会社及びその他子会社への資金の貸付及び利息の受取については、市場金利を勘案して利率を合理的に決定しております。

(注4) Ascensia Diabetes Care Holdings AGからの資金の借入及び利息の支払については、市場金利を勘案して利率を合理的に決定しております。

(注5) 子会社籍幹部に係る人件費等を支払っております。

(注6) 新株予約権の行使は、2014年6月25日開催の株主総会決議に基づき付与されたストック・オプションの当事業年度における権利行使を記載しております。

なお、取引金額は、当事業年度におけるストック・オプションの権利行使による付与株式に払込金額と新株予約権の公正価値を乗じた金額を記載しております。

(注7)リストラクテッド・ストック・ユニットに基づく新株式発行は、2022年5月25日開催の取締役会にて新株式の発行を行うことについて決議されたものとなります。なお、取引金額は、2021年4月28日開催の取締役会決議に基づき対象者へ付与され、2022年3月30日開催の取締役会決議にて権利確定に対しての業績条件の撤廃が行われたリストラクテッド・ストック・ユニットの権利確定額に、新株式発行決議を行った日の直前の市場株価である2022年5月24日の東京証券取引所プライム市場における当社の普通株式の終値である1,543円を乗じた金額を記載しております。

(注8)新株予約権の行使は、2021年6月30日開催の株主総会決議に基づき付与されたストック・オプションの当事業年度における権利行使を記載しております。なお、取引金額は、当事業年度におけるストック・オプションの権利行使による付与株式に払込金額と新株予約権の公正価値を乗じた金額を記載しております。

Ⅷ. 1株当たり情報に関する注記

1株当たり純資産額	759.31円
1株当たり当期純利益	154.96円